

第五回宮古島文学賞 選考評

もりおみずき

「宮古島文学賞」の最終候補作品八編が届くと、毎回厳粛な気持ちになる。この生き難い世の中で、じっと自分の心と向き合い、ひとつの作品世界を構築されたご努力に対し、畏敬の念が湧いてくる。それらの作品を紹介させていたいただきたい。

「あなたを連れていきたい」はラブストーリーであるが、その恋は煌めくことはない。あなたを宮古島に連れていきたいという詩を残して亡くなった人。宮古島の夜明けの海の描写が美しく、その光のなかで初めてその人への深い愛に気づきとめどなく涙を流す。「金曜日のバス」は本格的な児童文学作品である。障害のある主人公を作者は愛情深く見つめ、その行動や心理を想像豊かに描いている。大好きな祖母のハルコさんは金曜日のバ

スから一緒に降りてくれない。ハルコさんの死を読者の子どもたちに伝えることはできただろうか。「おもいでにすむ」は近未来の人間の暮らしに寒々としたものを感じた。自由に仮想空間を作り、アバターとして行き来し生身の自分は置き去りにされる。かすかに残る幼い頃の母との愛の思い出。それもまた、仮想現実であった。「御嶽専門カンカカリャ」は、宮古島の内包する霊的世界をドラマティックに時にユーモアも込めて描いている。驚き恐れつつ読んだ。宮古は「人と神が共に生きる世界」であると作者はいう。その世界は大切に秘められたままがいいのだろうか。「ブラックホールのほとり」は祖母と孫の交流を温かい筆致で描く。進路に悩む孫に、生きていくためのアドバイスを与え祖母は亡くなる。今もブラックホール（あの世との渡り廊下で）見守ってくれているという純朴なストーリー。

受賞作三編は一読温かい優しい気持ちに包

まれた。

一席「山の女」は格段に文章がうまかった。繊細な短文を連ね、小島の山に生きる女の二日間を描く。戦争があった。過疎の問題があり、認知を兆した夫のことがあり、自身の病いや老いの問題もある。それらを抱えながらも、まわりの人々に愛情を注ぎ誠実に生きてきた自分の来し方を肯定する。生きるとは実はシンプルなことではないかと納得した。

二席の「夜行島」は、ことに美しい作品で心に沁みたま。夜行島という造語が味わい深い。インドのガンジス川に向かう夜行列車で出会った二人のインド人と主人公が「島について」心を開いて語り合う。疾走する暗い窓を背景に明るい灯のともるその部屋に私も招かれていた。良質な短編映画を鑑賞しているような心地よさもあった。

佳作——銀游回帰——『スクが来た！』は命の回帰というテーマに取り組んでいた。六

歳の僕は銀色の帯になって押し寄せるスクを
掬いあげた時、命の神秘を確かに体感する。
良き文学作品を読む喜び。登場人物がしっ
かりこちらを向いてくれ、その世界に招いて
くれる時。生きていく希望を感じさせてくれ
る時。本当に生き難い時代であるからこそ。